

「ビワ、あるいは記憶」

—初稿—

2025/11/13

雨森 れに

人物表

立石 嘉一
けいじ かいち

(77) 腎臓を患っている老人
嘉一の弟。認知症。

職員A

職員B

1. 介護老人福祉施設・外観（昼）

大きめの介護施設。道路に沿った広い庭があり、様々な植木が植えてある。その中に実をつけたビワの木がある。

2. 介護老人福祉施設・受付（昼）

マスクをした立石嘉一（77）が面会受付票を記入している。

受付職員が票を受け取り、

「立石佳二さんのお兄様ですね。どうぞ」

面会証を渡す。

嘉一、面会証を首にかけ、館内を進む。

3. 介護老人福祉施設・廊下（昼）

館内はユニット型個室のつくりになつてている。

嘉一、館内の様子を見ながら歩いている。

ビービーという機械音。

部屋の前にいるランプが光る。

職員A、その部屋に駆け込む。

えずく音と、激しい咳。

職員Aの声 「食べ物はダメだつて言つたじゃないですか！」

嘉一、開け放たれたままの引き戸から室内を覗く。

中年女性が職員Aに頭を下げている。

女性 「（ごめんなさい。食べたがっていたものだから）

嘉一、また歩き出す。

何かを考えるように頭を搔きながら。

4. 介護老人福祉施設・佳二の部屋（昼）

小さい個室。窓側にベッドがある。

ぼーっとした様子の立石佳二（74）が横になつている。

嘉一 「よう。元気か」

嘉一がベッドと窓の間にパイプ椅子を広げる。
佳一の視線がゆっくりと嘉一を捕える。

嘉一、座つて佳二を眺める。

佳二、不思議そうな様子で、

「どなたでしたつけ」

嘉一、マスクをズラす。

嘉一、「バカ。俺だよ」

佳二、少し考えて、

「兄ちゃん、久々だなあ」

佳一、満面の笑みで手を差し出す。

嘉一、手を両手で包む。

「俺も先月まで入院しててさあ。来れなくてごめんよ」

「ああ？ どこが悪いん」

嘉一、「腎臓がよ。もうすぐ透析だつて。歳は取りたくないよ」

佳二、「それはつらいなあ」

佳二、それまで合っていた視線が外れる。

再度嘉一を見て、

「あの。どなたでしたつけ」

嘉一、手に力を籠める。

「バカ。俺だよ。嘉一」

佳二、理解できないという様子。

嘉一、「お前の兄貴。わかるか？」

佳二、「兄とはばいぶん会つてなくて」

嘉一、「俺が、お前の兄貴だつて言つてんだよ」

佳二、眉をひそめる。

包まれている手に気づき、手を離す。

窓に目を向け、外を見る。

午後の光を浴びるビワの木があり、実がなつている。
佳二も窓を見る。

消え入るような声で、

「ビワ、なつかしいねえ」

嘉一、佳二を見る。

嘉一、窓口の呼び鈴を鳴らす。

職員Bが窓口にかけつける。

職員B 「いかがなさいました？」

嘉一 「立石佳二の兄ですけど、持ち込みの相談は、こちらであつてますか」

職員B 「カルテ確認しますね。少々お待ちください」

職員Bが手元のパソコンを操作する。

職員B 「持ち込みは食べ物ですか？」

嘉一 「果物なんんですけど」

職員B、言いにくそうに、

職員B 「佳二さん、ミキサー食ですよね。固形物は無理ですか」

嘉一、頭を搔く。

ひらめいて、

嘉一 「それなら。家で剥いて、果汁を絞ってきたらいいけますか」

職員B 「いえ、ご家庭で調理されたものは禁止でして」

嘉一が眉をひそめる。

嘉一 「じゃあ部屋で俺が絞ればいいんですね？」

職員B 「ごめんなさい。それも衛生的に……」

嘉一 「俺が汚いって？」

職員B 「ご理解ください」

嘉一 「弟にビワ食わすだけじゃねえか。ちょっとぐらい融通(融通)かけてくれてもいいんじゃないの」

嘉一、足音荒く、その場を去る。

介護老人福祉施設・佳二の部屋（昼）

嘉一、椅子にどかりと座る。

嘉一 「ビワぐらいいいじゃねえか。なあ？」

佳二 「ああ、兄がよく庭で」

嘉一 「だから！ 僕がお前の兄貴だつて言つてんだろ！」

佳二、目を見張る。

嘉一、それに気づいて、

嘉一 「悪かった」

佳二からゆっくり緊張がとけていく。
視線が泳ぎ、嘉一の後ろで止まる。

「兄は木に登るのが得意でねえ。よく庭にあるビワを取つてくれたもんだよ」

嘉一、目をぎゅっと閉じる。

佳二が目を細める。

「兄ちゃん?」

嘉一が目を開ける。

佳二、しっかりと眼差し。

嘉一、頭を搔く。

「また考え方してるん」

「どうやつたらビワ食えるかなつてさ」

佳二、「兄ちゃんがくれるのはすっぱいからなあ。あの時も……」

佳二、言葉が出てこない。

それ以上続けるのを諦め、自身の右手を眺める。

佳二、「しわしわになつたもんだね」

嘉一に差し出す。

嘉一、その手を両手で包む。

嘉一、「おんなじだよ」

佳一は嘉一の手を握る。

嘉一と視線を合わせ、しばし見つめ合う。

佳二、「なあ。腎臓、ひとつあげようか」

嘉一、「お前、覚えてんのか」

佳二、また言葉が出てこない。

嘉一、「いいよ。いらねえよ」

嘉一、手に力をこめる。

佳二、「困つたように笑う。

「ビワ、見に行つてみるか?」

佳二、「木に登つちやダメだよ」

嘉一も笑顔になる。

介護老人福祉施設・庭（昼）

嘉一、佳二の車椅子を押している。

初夏の日差しに目を細める。

嘉一、「あちいな。おい、大丈夫か」

佳一、「ちょうどいいよ」

嘉一 「そうか」

嘉一、足を止める。

自身の背中に手をまわす。

痛みに顔がゆがむ。

佳二 「兄ちゃん、どうした」

佳二、振り返る。

嘉一、慌てて、

「脇腹わきがつりそうになつたんだよ」

嘉一 「昔からそうだよね。足とか脇腹とか」

嘉一 「うっせえ。今日はよく喋るなあ」

嘉一、笑いながら額の脂汗を拭う。

嘉一 「動くぞ」

車椅子を押す。

ふたりはビワの木を目指して進む。

佳一 「子供の頃は足が速かつたのになあ。このぐらいの距離なん

んて一瞬だった」

嘉一 「お前は逃げ足が速かつたんだろ」

佳一 「兄ちゃんだってそ娘娘だろ」

佳二がくすぐすと笑う。

車椅子が止まる。

嘉一、再度額の汗を拭う。

車椅子の横にかがむ。

嘉一 「ウチにあつたのもこのぐらいのさ——」

佳二、ぱーっとした表情。

嘉一 「おい。もつと昔のこと、話そうや」

佳二に変化はない。

嘉一、鼻で笑い、ビワの木を見上げる。

佳二、その様子を見て、同じく見上げる。

ビワの木が穏やかな風に揺れる。

道路から子供たちの笑い声。

嘉一、ゆっくりと目を閉じる。

おわり